



いつか語られる きみとぼくの物語

著／秋山真琴 絵／御城伸座

猫の鳴き声で目が覚める。

顔をあげると、寝る前には確かに閉まっていたはずの部屋の襖が半開きになっている。

どうも眩しいなと思えば、外はすっかり明るくなっていて、下半分がびりびりに裂かれた障子から、夏の陽射しが差し込んでいた。猫に起こされずとも、遠からず、陽射しがぼくの顔を直撃して、目が覚めていたことだろう。

鳴き声は押入れの中から聞こえた。

開けてみれば冬に使う毛布の上に猫が仰向けになっていた。

ぼくの知る限り、そこは家中でいちばん涼しい場所だ。人間が入るには少し狭いが。

「毛づくろいをしているだけなんですけれども、文句がおりますかお兄さま」

ないです、猫さま。ぼくは押入れを閉める。

ついでに襖も閉めてから部屋の中を一望する。最後にぼく以外の人間がこの部屋を訪れたのはいつだったろうか。部屋の四方には埃が目に見えるぐらいたまり、埃と同じくらい本も積み重ねられている。

寝る前に読んでいた本は、どれだっけなと記憶を探りながら手を伸ばしたが、本を読みたい気分でもなかったので、布団の上に横になる。

天井の木目に目を向ける。風邪を引くたびに、この奇妙な模様が、ムンクの叫びに見えて震えるのだが、どうすればいいのだろうか。畳や障子と違って天井を張り替えるのは難しい。ぼくは裸の胸に手をあてた。いつの間にか、甚平のひもがほどけていた。けれど、誰が見ているでもないし、このままでいいか。

心臓が一定の間隔でふくらんだりしぼんだりするのを指先で感じながら、ぼくの中に小説を書かなくてはという強迫観念にも似た気持ちが芽吹いてゆく。からだの中の小人さんたちが、いっしょうけんめいポンプで空気を入れるように、ぼくは小説を書きたいと思う。思う、のだけれどしかし。

しかし、ぼくは書かない。

今日は小説を書くために仕事を休んだはずなのだけれど、ぼくは小説を書かずに、こうして横になったまま動かない。先週、ぼくがレジを打っているときに感じた、このまま一生、レジを打って人生を終えるつもりかという恐怖は、今や、なぜかぼくの中から失われ、それはもう遠い日にぼく以外の誰かが見た夢のように思える。

だからぼくは小説を書かない。小説を書かずに、猫と戯れることも、部屋を片付けることもせず、こうして布団の上で寝転がったまま、動かないでいる。動けないでいる。

もちろん、小説を書かなくてはならないという焦燥感は、刻一刻とふくれあがってゆくけれど、それだけでぼくのからだは動かない。今のぼくには、恐怖が欠落している。生活が逼迫しようとも、新人賞の応募締め切りが近付こうとも、恐怖が感じられなければぼくは動くことができない。そしてその恐怖は、ぼくの中からすでに失われている。

レジを打っているそのときに小説を書ければいいのに、とぼくは思う。

そこで思いだした。以前にもそう思ったぼくは、仕事中に、紙切れにふと思いついた言葉の羅列を記しておいたのだった。あの紙切れはどこにやったのだろうと、頭の中の筆筒を開けてみる

。検索はすぐに終わった、思いだしたのだ、あの紙切れを制服のポケットの中に入れておいたまままだということに。溜め息。

けれどもぼくはすぐに立ちなおる。ぼくの脳は、紙切れを入れた場所を思い出すことができた、それぐらい有能なぼくの能なら、ぼくがあのとき紙切れに走り書きした内容まで思い出すことができるのではないだろうか。

ぶるると馬が鼻を鳴らすように自分自身を奮い立たせて、ぼくは筆筒をひっくり返す。引き出しという引き出しを引きずり出し、ぼくは探す、あの紙切れに書かれたぼくの閃きを、もしくは閃いたぼくが紙切れに記した内容を見ていたぼくの目の記憶を。

でも、きっと、むりだろうなあ……と暗に予想していたぼく自身の予想に反し、ぼくは思い出すことができた、思い出すことに成功した。あの焦燥感と緊迫感の両方に煽られ、天啓を受けたぼくが紙切れに書き残した閃きを。

その瞬間、ぼくは喜び、舞い上がり、改めて自分の記憶力のよさを存分に賞賛し、そして、ぼく自身の底の浅さに絶望した。なぜなら、思い出すことができたのは「後悔、先に立たず」という言葉だったからだ。あの瞬間、ぼくは何を思って、この言葉を紙切れに書いたのだろうか。書いた内容は思い出すことができたものの、肝心なのは、なにを思ってそれを書いたか、だ。それを思いだせない限り、ぼくはなににも思いだせていないのに等しい。後悔、先に立たず。

／

歯の裏側を舌でなぞる遊びにも飽きたころ、猫が押入れを開けて出てきた。なんらかの災害がおこったとき、どの部屋にいても崩落する危険性のある家から逃げ出せるように、猫には襖という襖を開けられるようにしつけてある。

と、言えば聞こえがいいが、実際は、ぼくがいろいろな場所に猫を閉じ込めて遊んでいるうちに、猫の方が勝手にあらゆる場所から逃げ出す術を身につけただけである。

猫は閉められたドアを見上げてから、こちらを振りかえり、
「わたくし、お腹が空いたのですけれども、このドアを開けてお台所へ行かせていただけますでしょうかお兄さま」

と言った。

ぼくが黙って襖を開けて透き間を作ってあげると、猫は下僕に払う礼儀はないとでも言うかのよう、黙って襖と壁の間を通り抜けていった。このように猫は時おり、自分で開けられるはずの襖を、開けられませんか、ニコリともせずに言うことがある。

ちなみに、猫が人語を解さないように、人間も猫語を解さない。したがって、猫の科白はすべてぼくの捏造であり創作である。

そうとも、ぼくは猫とだってコミュニケーションが交わせないのだ。その程度の人間が、果たして人間さまと会話ができるだろうか。いや、敢えて言おう、できる、と。そもそも、多くの人間は人間同士としか会話しない。どんなに愛くるしく、そして知的に見えても、しょせんは犬畜生と同類かそれ以下であるところの猫に話しかけるだろうか。そんな奇矯な振るまいをするのは、ぬかるみの中でのたうちまわる鼠か、ぼくぐらいだろう。

しかし、それにしても、武士は食わねど高楊枝、文士は食わねば筆を執れず。もしかしたら、あるいはもしかしなくとも、ぼくがどうしても小説を書く気になれなかったのは腹が減っていたからかもしれない。腹を満たしたら創作欲の代わりに睡眠欲こそが発芽しそうだという確信にも似た予感を見捨て、ぼくはなにか食べるものを探して部屋を出た。

家の真ん中を通っているがゆえに日の当たらない廊下は、ひんやりとしていて、裸の足が心地よい。まずは水でも飲もうかと思ったところで、呼び鈴が鳴った。

無視しようかとも思ったが、二度三度と繰り返されたので、仕方なく表に出ると、門の前に見知った顔が立っていた。

「夏海さん」

ぼくが声を掛けると、どうしてか制服を着ていた彼女は、

「先生、だらしがないですよ」

と指を突きつけてきた。夏海さん、誰かを指差すとき、人差し指以外の三本の指は夏海さん自身を指差しているのですよと言おうと思ったが、その前にぼくは自身の格好のだらしなさに気がついた。

手近なところにあった柱に身を寄せ、甚平のひもをすばやく結わく。

「お待たせいたしました。どうしたんですが、夏休みなのに制服なんて着て」

「今日は一回目の登校日なんですよ」

奇異な表現をするなど一瞬だけ思ったが、そう言えば夏休み中に何度か学校に行ったことを思い出した。夏休み中に提出しないといけない宿題を提出したり、夏休み中に出される課題を受けとったり。あれはまだつづいているのか。厭な風習ばかり長つづきする。

「そうですか。それで、ですか」

「そうなんです。で、ホームルームを終えて帰ってきてみたら、家に誰もいないんです。ひどくないですか？ わたし、うっかり鍵を持ち忘れてしまっ」

「それは大変ですね」

首肯して、そしてぼくは彼女の背後を指差した。

夏海さんは振り向いて、ぼくの指差している先を目で探したようだけれど分からなかったのか「なんですか」と聞いてきた。

「公園」

夏海さんは一拍の間を置いて、言った。

「先生、それってわたしにお母さんかお姉ちゃんか妹が帰ってくるまで、公園で待ってろってことですか」

公園を指差すことで示唆されるメッセージがそれ以外にあるかどうか考えていると、夏海さんは門を開けて、我が家の敷地内に踏み込んできた。

いかんのう、ゴーンゴーン。脳内坊主が警鐘を鳴らす。

うら若い女子を自室に招き入れるところを見られたら、ぼくはもう生きていけない。

「ちょっと待って夏海さん」

「なんですか」

ずかずかと乗り込んできた彼女は、ぼくから数十センチほど離れたところで立ち止まると鋭い視線を飛ばしてきた。至近距離からしかも上目遣いで見られていることで、こめかみを汗が流れ

るが、今日も立っているだけで汗が出るほどに暑いので、汗をかいていることが発覚しても特に問題はない。

「ここでこうして立ち話をしていることは、お互いの利にならない。ルーエに行きましょう」

「ええ」

夏海さんはにっこりと微笑むと一歩、ぼくから遠ざかった。そして速やかに、ぼくが家の中に逃げ込む前に、ぼくの手を取り引っぱり始めた。やれやれ。財布を取ってくることも、鍵を閉めることもできなかった。まあ、強盗が押し入っても盗めるものは本しかない。陳腐な猫殺しの少年たちがやってきたとしても、彼女ならきっと少年たちに見つかる前に首尾よく逃げ出せることだろう。夏海さんに拘束されていない方の手でせめてもの抵抗で門を閉めながら、ぼくは溜め息。

／

ルーエはうちから十分ほどの距離にある喫茶店である。

個人が経営しているお店で、住宅街の中に埋没している。パッと見は、はやりのガーデニングに精を出している一般的な家屋にしか見えない。ただ、道路に面してせり出しているテラスにテーブルが三つ並べられ、その上に手書きのメニューが並んでいることからのみ、ここが喫茶店であることが分かる。

夏海さんをつれたぼくは階段を上り、テラスを横切り、ガラス張りの戸を引いて中に入る。程よく効かされたエアコンによって、店内は寒すぎず、適度な涼しさを保っていた。

外からの光を充分に取り込んでいるため、逆に店内は照明を絞っている。数少ない照明のひとつを使い、エプロンをつけた男の店員がカウンターの向こうで本を読んでいた。

「いらっしゃい」

ぼくたちの気配を感じたのか、男が顔をあげる。

「なんだ、楼介か。きみは……楼介の生徒さん、だったかな」

「はい。読村夏海です。よろしくお願いします」

ぴょこんとおじぎした夏海さんに、男――此町彼方が微笑む。

「好きなところに座って。今、おしぼりをだすよ」

此町は本に葉を挟むと立ち上がって、カウンターの内側でゴソゴソやりだした。

ぼくは店内を見回している夏海さんをしり目に、いつもの席に腰を下ろす。

この店はぼくが学生の頃からここにあったが、当時のぼくはこんなところに喫茶店があったなんて思いもしなかった。ぼくがこの店の常連になったのは、此町がこの店の娘さんと熱愛の末、ゴールインしてからだ。

「はい、どうぞ」

差し出されたおしぼりはよく冷やされており、そう言えばまだ起きてから顔も洗ってなかったなと思いだし、それで顔面を拭きたい衝動に駆られたが、目の前に夏海さんがいるという事実がぼくの手先に迷いを抱かせた。結果、ぼくはそのおしぼりで手を拭き、手首を拭き、少し口元を抑えるに留めた。

「先生はどれにしますか」

夏海さんは見ていたメニューを、こちらに向けてきた。

「そうですね。ぼくは無難にアイスコーヒーにするつもりですよ」

「ええっ、アイスコーヒーだけ？ せっかく、ルーエに来たのに……」

どうやら夏海さんはケーキを食べるつもりらしいが、どれにしようかで迷っているようだ。ときおり、お腹のあたりに手をやっていることから、コレステロールも気にしているのかもしれない。

視線を此町に向ける。

「なんだ？」

「実は無一文です」

「ほう」

此町は目を細めて、めがねの弦を押し上げた。

「注文する前に白状するとは、なかなかいい度胸だ」

「仕方がなかったんだ。次に来たときに払うから」

「ん……」

此町は入口に目を向けた。白いカローラが道を走ってゆく。

「まあ、たまにはいいだろう。今日は香奈枝の誕生日なんだ。ほどよく寛容な気分になっているし、奢ってやろう」

「アイスコーヒーとハニートースト。アイスクリームはふたつ」

「私、キャラメルマキアートをアイスで。後、ザッハトルテお願いしますね」

「きみたち……まあ、いいか」

此町は唇を歪めるようにして微笑むと、カウンターの中を所狭しと働きはじめた。

「ところで」

ぼくは夏海さんに言う。

「小説は書いてますか？」

「ええ、書いてます。でも」

夏海さんは話したそうなそぶりを見せたので、ぼくは膝のうえで手を重ねると首を上下させてつづきを促がした。

「以前ほど、書くことが楽しくなくなってきました。むしろ、辛いです、とても」

「どうして」

「それが、分からないんです。じぶんでも不思議です。以前は授業中でもお風呂の中でも寝ているときでさえ、次は何を書こうか、ネタ帳に書き溜めたプロットのうち、どれを実際に書き起こそうか考えていたぐらいだったのです。けれど、最近は」

「書く気がおきない？」

「そうなんです。呼吸をするのも忘れるぐらい熱中できた小説が、今は、もう全然、別物なんです。小説について考えるのもいやになってしまったし、いざ小説を書こうとしても、書いているのは私の手なのに、書かれてゆく文章はどう見ても私が書いたものには見えないのです」

差し込む太陽光がガラス細工に当たる。象の足に触れた光は、象と象にまたがっている男の体をつたい、男が持っているたいまつから放たれて、天井に虹色の軌跡を描いている。

「それに書くスピードも落ちました。以前は、先生はご存知でしょう、何十枚でも書くことができました。さすがに百枚には届きませんでしたけれど、多くの誤字脱字を許せば、一日にその四分の三ぐらいはかんたんでした。一週間で五百枚の長編小説を書き上げたとき、私は自分が量産作家型だと確信しました。でも」

「それは失われてしまった」

「はい、今の私は二歩進んで三歩戻っているような千鳥足です。最初、書くスピードが落ち始めたことには気づいてなかったんです。けれど、自然に、自然に、私のからだは書けないからだに変わって行って、気がつくとも書くことが苦痛になっていました。一文字、一文字、打ち込むたびに、脳細胞が失われてゆくような痛みが走るのです。でも、今はまだ書けています。キーを打つたびに、ああ、これは私の言葉じゃないな、夜、誰かが見ている夢を勝手に盗み見ているように、これは他の誰かの作品を無意識のうちに盗作しているなど、そんなふうに分かってしまうのです。でも、それでも私はまだ書いています、なんとか、書けています。何故って、恐くて仕方がないからです。いずれ私は一文字も書けなくなってしまうかもしれない。先生からもらったおさがりのコンピュータを、叩き壊してしまうかもしれない。そんな未来が恐くて、私は少しでもそんな明日を遠ざけようと書いているんです」

「今、作品は持ってる？」

「あ、はい」

夏海さんは学生鞆をごそごとと漁ると、ピンク色のかわいらしいUSBフラッシュメモリを差し出してきた。

「此町、ノーパソを貸してもらえないか」

「仕方がないな」

此町はカウンターの内側に置いてあったVAIOをカウンターの上に置いて、こちらから使えるようにしてくれる。何本ものコードがオーディオ機器に繋がっている。iTunesが起動されている。ある曲が再生されている、試しに他の曲に切り替えてみたら、店内に流れていたBGMも変わった。思ったとおりだ。

カウンター席に移り、夏海さんから借りたフラッシュメモリをUSBポートに差す。

彼女は書き終えた作品も、書き途中の作品も、書き終えることのできなかった作品もすべて、このフラッシュメモリに入れて管理している。たえず持ち運んでいけば、学校で小説を書きたくなったときもパソコン室で書けるからだ。

フラッシュメモリの中には、彼女が使っていると思われるテキストエディタと無数のテキストファイルがある。すべてのテキストファイルは頭に、書き始めた日付を意味する八桁の数字があり、その後にタイトルが記載されている。

記憶を探り、最後に読んだ作品を思いかえす。そしてその作品以降に書かれたものに、ひとつひとつ目を通す。

「おい、出来たぞ」

顔をあげる。気がつけば、店内にはハニートーストの甘いにおいが漂っていた。ぼくはテーブル席に戻り、夏海さんにフラッシュメモリを返す。すべてを精読することは出来なかったが、精読を要するほどの作品はなかった。悲しいことに、かつての作品と異なり、彼女の作品は流し読みで足る作品となっていた。ぼくはその理由をハニートーストにフォークを当てながら考える。

以前の夏海さんの作品は、ある作家の影響下にあった。元々、彼女はその作家が好きで、その作家のような作品を書きたかったのだそうだ。その影響を強く受けてしまうのは、やむないことだろう。しかし、彼女はそこから飛躍した。その作家に似ている作家を読み、その作家の影響をも受け、さらにその作家に似ている作家を読み、その作家からも影響を受けた。当時の彼女はさながら乾いた砂漠か、長きに渡り鎖国を続けていたかつてのある国のように、異なる筆致文体構造思考を貪欲に取り入れていった。

それは極めて技巧的な模倣による複製の量産であると同時に、あるいはオリジナリティとでも呼ぶべきものが生成されてゆく過程であった。ぼくは素直に彼女の、その吸収する能力を賞賛し、しだいに現われてゆく頭角に驚いた。

そうして作られたのは手癖だ。何十もの作家の何百ものデッドコピーを経て、彼女はついに読村夏海自身を獲得し、目を瞑ったままでいてもそれを引き出せるようになった。

異変が起こったのは、その後だ。

ぼくは言う。

「夏海さん、ぼくが思うにはですね。小説を書くこともそうなんですけれどけど、創作というのはこの世でもっとも孤独性の高い作業です。どんなに誰かと一緒になにかをなそうとしても、それは結局のところ、個々人の創作の結果が寄り添いあったにすぎません。最終のところ、創作とは、我々ひとりひとりがどこまで、自己を見つめられるか、そこからなにかを引き出せるか、です。創る、とはつくるとも読みますが、きず、とも読みます。創ることは、無から有を生み出すもので、自分の中からなにかを出して創るということは、エネルギー保存の法則ではないですが、肉体的に精神的に自分自身を創つけることと同意です。夏海さん、今、あなたは自分自身をきずつけてしまったので、少し休息を取っているだけなのですよ、だから気にする必要はありません。あなたはすぐに」

「先生、お言葉ですが」

夏海さんは、既にザッハートルテを食べ終えていた。

ぼくのハニートーストは、まだ、だいぶ残っている。

「それは違います」

彼女は断言した。

「私が思うに、そうですね、ええとですね、かつての私は小説を書くことを楽しんでいました。創作することが、無から有を生み出す行為で、それによって私自身が傷ついているというのは面白い考えだと思いますが、だとすれば以前の私は、創作によって傷ついていくことでさえ楽しんでいた節があったように思います。たとえば先生」

そう言って夏海さんは、手首をぼくの方に向けた。

「長い間、キーボードに向かっていると、手首のこのあたりが痛くなりませんか。それに腰や肩、目も痛くなります。まったく、この年でもう腰が痛いなんて、信じられませんけれど、座った状態でいつづけることや、何時間もパソコンの画面に向かいづけるのは、おそらく私自身が思っている以上に過酷な、労働なのだと思います。労働、たとえば、先生。大人がする仕事も労働ですよ。労働が楽しいものであるか、苦しいものであるか、それは人によって違います。自分の仕事が本当に好きで、お金のためでなく楽しむために仕事をやっている人もいれば、お金のために仕方なく仕事をやっている人もいます。他にもいろいろな人がいると思いますが、今

の私は、そこまで想像の肢を伸ばすことができません。だから先生。かつての私は小説を書くという労働を、楽しんでいたのです。そして今は楽しんでいない。したがって、私がもしまだ本当に小説を書くことを楽しむことができるならば、そもそもにして疲れを覚えないので、書くことが嫌になったり、休息を必要としたりはしないのです」

ぼくはハニートーストを食べおえた。

「夏海さん」

「はい」

「小説を書くのが、嫌いになったの？」

夏海さんの顔が赤くなる。最近になって手入れを始めた眉がしなり、ぼくの問いに答えようとして、でもその口から意味ある言葉が吐きだされることはなく、耳まで赤くなったかと思うと、今度はゆうれいでも見たかのように血の気が引いていって青白くなった。いつの間にか、下唇が歯で押さえられている。それはからだの中心から放たれている悲鳴が、そとに漏れでないようにしているように見えた。



帰途。

ぼくらは蝉々のオーケストラに包まれながら歩いていた。無言だった。

夏海さんが今、なにを考えているか考えてみる。彼女はある時期、学校を億劫に思うようになった。いじめに遭っているわけではなかった。思春期特有の自意識に問題があったわけでも、彼女の家庭に問題があったわけでもなかったが、彼女は学校を億劫に思い、朝、いってきますと家を出てからぼくの家を訪ねていた。

その頃のぼくは、彼女の下の子の家庭教師をしていた。家庭教師と言っても、ぼくが彼女の家に出向くのではなく、彼女の方がぼくの家に来ていたのだけれど。

したがって当時のぼくにとって夏海さんは、見ず知らずの中学生ではなく、教え子の妹の片割れというように認識していたと記憶している。

ぼくは夏海さんがひとりで我が家にやってきたその日に、このことを彼女の母親に教えた。彼女の母親は寛大で、そしてぼくを過大評価していた。上のふたりの娘が国公立の大学に入学したのを、彼女はぼくの功績だと思っていた。

「夏海もよろしくお願いします」

軽やかに放たれた言葉に、ぼくは、ああ、この人は娘に関心がないのかもしれないかもしれない。と思った。娘に対する無関心さが、ぼくへの信頼に繋がっているのだろう。

「夏海さんはどうして学校に行きたくないのですか」

数年前のぼくが数年前の夏海さんにかけてた言葉を回想する。

「どうしてそんな分かりきったことを聞くの、先生」

「夏海さんにとっては分かりきっている答えかもしれませんが、ぼくにとってはそうではないからです」

「先生は人生に飽いているのでしょうか」

夏海さんの目はまっすぐだ。その口上にも迷いはない、ように見える。

「私も一緒です」

「ぼくは真剣ですよ、生きることに。一生懸命、やっていますよ」

「そんなに生きて、どうするんですか？」

「夏海さん」

「はい」

「その問いに対する答えは持ち合わせていません。夏海さんは持っていますか」

「はい、私はきつともうすぐ死にます」

「そう」

ぼくは納得して頷いた。けれど、すぐに、それはよくないと思った。

夏海さんに死なれるのは具合が悪い。ぼくが今までに期せずして築いてきた彼女の姉や母に対する信頼が砕け散ってしまう。

「そうでしたら夏海さん。どうして今すぐにでも死なないのですか」

しかし、ぼくの口から出た言葉は、ぼくが直前にまで考えて用意していた言葉とは似ても似つかず、むしろ正反対と形容するに相応しい言葉だった。

夏海さんは返答しなかった。だから、ぼくは続けて言うことにする。

「夏海さん」

「はい」

「あなたは今日、ここで死んだことにしましょう」

「死んだ、ことに」

「そうです。しかしあなたは明日以降も生きていきます」

「はい」

「小説を、書いてみませんか」

「どうしてですか？」

「どうせ、一度は捨てた命じゃないですか。小説のひとつやふたつ、書いたっていいでしょう」

「嫌です、小説なんて、面倒くさい」

この一言は、ぼくの中から彼女を説得しようという意気ごみはおろか、このころのぼくに宿っていた、小説を書きたいという熱意さえ吹き消しそうだった。けれども、

「やっぱり。書きます」

と彼女が言ってくれたおかげで、灯火ていどの炎はすぐに元通りになった。

ぼくはそのことを素直に喜んだ。小説を書くということが、夏海さんの人生においてどれだけを占めるかどうかは分からないけれど、とりあえず当面のところ、小説を書くことが死ぬことより優先されるだろう。何故って、死ぬのはいつだって出来るけれど、小説を書くことは死ぬ前しか出来ないのだから。

そしてぼくは小説を書く仲間が出来たことに関しても喜んだ。所詮、中学生の女の子が書く小説だ。たいしたことはなかろうと予感したが、それはぼくにも言えることだ。特になにをするでもなく生きているぼくが書く小説なんて、世間に溢れかえっている他の多くの小説に比べれば、紙の表面に浮かんだ黒いゴミのようなものだ。

後にぼくは、どうしてこのとき夏海さんが小説を書くことにしたのか彼女に直接、聞いてみた。彼女の返答は以下の通りであった。

「だって、先生。私が小説を書かないって言った瞬間、泣きそうだったんだもん」

はは、とそのときのぼくは苦笑するしかなかった。

今のぼくはどうだろうか。先ほどぼくたちは、夏海さんの家の前を通り過ぎた。意図的に通過したわけではなく、考え事をしながら歩いていたのでうっかりしていたのだ。しかし、どうやらうっかりしていたのはぼくだけのようであって、夏海さんは肩を落とし、下を向いてはいるけれど、極めて現実的に彼女の家をではなく、ぼくの背中を追って歩いているように見えた。

それはくだらない感傷か。

ここまで来て、彼女を退けるのも面倒なので、もう腹を括って家にあげてしまうことにする。そうすることによって、ぼくは夏海さんの母親に電話を差し上げなくてはならないという、新たな面倒を背負うことになるのだが、今現在のみ注目するならば、それはそう悪くはない、それなりに真っ当な選択肢に思えた。

家に帰ると、猫が待っていた。

どうやら皿に盛られたご飯を食べ終えてしまったので、なにかほしいらしい。もしくはトイレ

を掃除してほしいのかもしれないし、ただ単にお腹がかゆいので撫でてほしいだけかもしれない。

とりあえず、ぼくは腹を撫でてから、皿にキャットフードを盛ってあげることにする。来客中、彼女は人の言葉を話さず、猫的に振舞うので、その希望が分かりづらい。いや、来客中であろうがなかろうが猫が人の言葉を解すことはない。猫が話すというのはぼくの空想だ。今は夏海さんがいるから、ぼくの空想は暴走しない。だから顕現することもない。

夏海さんを部屋に通す。

ぶうんと蠅の飛ぶ音が聞こえたけれど、すぐに聞こえなくなった。それは何かの予兆のようで、ぼくを嫌な感じにさせた。とは言え、その音に不快感を抱いているのは、そのときのぼくではなく、そのときのことを思いだすぼくだ。

「どうぞ」

万年床を取り払い、ぼくは夏海さんを座布団に座らせる。

部屋に中心に座する夏海さんを一時的に放置し、ぼくは四方に散らばった本や紙切れを、あるべき位置に戻したり、ゴミ箱に入れたり、押入れに避難させたりした。その片付けには五分ほどの時間を要した。

それなりに見るに耐えうる部屋になったなと一息ついたとき、ぼくは夏海さんが横になって寝ていることに気づいた。

「なんだ」

目を瞑っているのなら、どんなに部屋が片付いていても意味がない。

まあ、起きたときに部屋がきれいだと、ちょっと気分がよくなる。ぼくは夏海さんが起きたときのために部屋を片付けたのだ。そう思うことにしよう。少し気分がよくなった。

けれど、やっぱりぼくが部屋を片付けたのは無駄だった。

夏海さんは眠ったまま、起きなかったのだから。

必要最低限しかものを食べない。

満腹になりたいという欲求はない。

同様に、満たされたいという欲求もない。特に自分自身に制限を課しているわけでもない。ただ、腹八分目という状態が適当だと思うだけだ。過ぎたるは及ばざるが如し。

そう言えば以前、此町と、人間の欲望は限りないものであるという話をした。

此町が言うところによると、人間の特性のひとつに慣れというものがあるらしい。

劣悪な環境を長期間、強いられた人間はやがてそれに慣れ、強くなる。満たされた環境に肩まで浸かってしまった人間は、もう元通りにはなれなくなる。ある地点を指向し、その方向に邁進して、やがてそこに至り、そこに座し、時間が積もり、その地点が有していた魅力はもはや特別なものではなくなったとき、ひとは次なる地点を目指すことになる。

かつて香奈枝さんとの結婚生活こそが、至上の生活に違いないと思っていた此町は、今、子どもが欲しいらしい。

欲望をして人間かそうでないかを判断しうるのなら、ぼくは人間ではないのかもしれない。

人と人との間にあって、人間ではないもの。

それがぼく、かもしれない。

そんなことをうつらうつら考えているうちに夜も更けた。

温めたみそ汁を飲んだだけで空腹感を解消することの出来てしまったぼくは、夏海さんを起こすべきか否か思案する。夏海さんはまだ先ほどと同じ姿勢で、一枚の座布団の上に丸くなって寝ている。その様は猫のようだ。

「夏海さん」

ぼくはそっと声をかける。反応はない。夏海さんは動かない。

「夏海さん、もう夜ですよ。お家に帰る時間です、起きましょう」

反応はない。

「夏海さん」

「そんな方法では、百年たっても起きませんわ、お兄さま」

いつの間に入ってきたのだろう、襖が少しだけ開いていた。猫が顔を覗かせている。

「その子はずっと後回しにしてきた選択に手を伸ばそうとしていますわ。自分自身に暗示をかけて生きてきたのでしょうか——『私には遣り残したことがある、それを成し遂げない限り死ぬことは出来ない』——大方、その何かを成してしまったか、諦めてしまったのでしょうか」

「どういうことだ」

「その子、死にますわよ」

ぼくは手を伸ばして夏海さんの手首に触れた。

脈は、感じられない。

角度を少し変える。駄目だ。血の流れが止まってしまったのか、それとも外からでは感じ取れないほどに弱くなっているのか。わずかに躊躇してから、唇に触れる。弱々しい息。

「息はある」

「きっと肉体が死ぬことを拒絶しているのよ。だから、心臓は脈打ち、呼吸はする。けれど、目が覚めることはない」

「どうすればいい」

「お兄さま」

猫が顔を上げる。琥珀色の瞳があやしく輝く。

「まさか彼女を起こす気？ なぜですか？」

「なぜ、って……」

「彼女を起こすことは、彼女の意志に反しますわよ。冒涇ですわよ」

夏海さんのことを思う。彼女はぼくの教え子にして、弟子にして、同胞だ。

彼女を死なせないことは、ただの自己満足だろうか。

「ああ、ごめんなさい」

猫がやってきて、ぼくの膝に肢を乗せる。ぼくは思考を中断させる。

「お兄さまの考えは長ったらしくてきれいな。服を脱いで、背中を向いてくださる」

「どうして？」

「どうしても」

よく分からないが、猫はときに自分の思ったとおりに物事が進まないと、家具という家具で爪

とぎを始めるという悪癖がある。ぼくは素直に従うことにした。今、誰かに入られたら困るなあと思いつつ上着を脱ぎ捨て、猫に背中を向ける。

「いくわよ」

「うん？」

次の瞬間、なにが起こったか、ぼくは知覚することができなかった。

おそらくは跳び上がった猫が全力でぼくの背中を引っかいたのだろうと思う。どうしてぼくがこのことに対して確信が得られないかと言うと、奔った激痛に気を失ったからだ。

／

無人の廊下を壮齡の男が歩いている。

廊下には真紅のカーペットが敷きつめられ、左右の壁には一定の間隔で灯りが揺れている。歩いている男は、西洋の王族が身にまとうような豪奢な格好だ。ぼくは廊下に飾られている絵画の真下に立って歩く男を観察する。しかし、男はぼくのことをちらりとも見なかった。視界に入ったうえで無視しているのではない、元から見えていないのだ。どうしてか、そのように思った。

すわり心地が悪い。妙な感覚だ。

それはうまく言葉で言い表せないけれど、敢えて言おうとするならば、本来、ぼくはこの廊下にいることが出来ないはずなのに、実際にいるというあいまいな感じだ。本来、そこにはいないのだから、男はぼくを見なかった。見る事が出来なかった。

足元を見ると、猫がいた。

「ここは、いったい？」

「物分りの悪いお兄さまにも分かるように、多少の語弊を交えつつかんたんに表現をして差し上げるわ。ここはあの子の心象世界の中よ」

「心象世界」

それが具体的にどういったものであるかは分からない、でも、それがぼくの思うとおりのものだとしたら。

「今のは魔王か？」

「さあ」

猫はちりと首の鈴を鳴らせると男の後を尾けるように歩き始めた。

魔王。

それは夏海さんの小説に出てくる登場人物のひとりだ。

最近の風潮よろしく、夏海さんの作品も個々に独立しているようでいて、実は同じ世界を舞台にしている。魔王とは壮大でもなんでもない読村夏海ワールドに出てくる最初の登場人物だ。最初、と言うのはつまり作中における最初という意味で、彼女の世界観においては魔王こそが世界の創造主であるわけだ。

振り向いてぼくは絵画を見上げる。額縁に納められている絵は黒一色だ。そういう芸術なのではない。絵があることを夏海さんは考えていても、それがどんな絵かまでは考えていなかったのだろう。

猫に付き従うようにぼくも廊下を歩き始める。

中世の城内にタイムスリップしたかのような感覚に陥る。揺れる蠟燭のあかりの中、ぼくは無音で歩く。音がしないのは、本来、この世界にぼくという登場人物がないからだろうか、それとも単にカーペットが分厚いからか。

ぼくと猫は、静かに魔王に続いた。

歩きながら思う。ああ、なんて皮肉だ、と。

無人の廊下を歩きぬけた魔王は、テラスに出て、手すりから星空を眺めるのだ。かつて空には星々の輝きはまったくなかった。魔王は自らの孤独さを憂いて、魔王と呼ばれ称されるに相応しいその魔力を持って、夜空に星を打ち上げるのだ。いずれその星に知性が発生し、この魔王城を訪ねてくれることを願って星を飛ばすのだ。



つまり、ぼくたちこそ魔王の悲願に他ならない。

魔王の頑健であるはずの両肩は明らかに下がっている。夏海さんはまだ、ここ魔王城と、魔王によって生まれた星を舞台にした物語しか執筆していない。いずれかの星のなにものが、魔王城を訪れる物語はまだ書いていない。この、虚無と諦念に満ちた魔王の後姿を見る限り、彼女はまたその物語を着想さえしていないのだろうか。いや。

「お兄さま」

猫の言うことが真実ならば、夏海さんはこのまま死ぬつもりなのだ。

であるならば、魔王の孤独が癒されることは未来永劫ないだろう。

魔王——夏海さんは、彼の孤独を一瞬たりとも考えたのだろうか。いや。

「お兄さま」

まさか、ぼくは再度、魔王の後姿を見る。

彼のテラスを目指す足取りは弱々しく、今にも立ち止まってしまいそうだ。

ぼくは走り出して、魔王の顔を覗き込みたいという欲求に駆られる。先ほどは壮年の男のしか見えなかった魔王だが、まさか、彼は、いや彼女は読村夏海ではないのだろうか。

「お兄さま」

「……え」

「なにを茫とされているのですか。しっかりしてください」

見れば猫はいつの間にか道を逸れ、暗い廊下へと足を伸ばしていた。

「あの男の後を追っても、それはあの子の最新の物語には繋がっていませんわよ」

「ど、どういうことだい」

「ここがあの子の心象世界であることは覚えていらっしゃいますよね。ここはその始まり。この城に似た世界があの子の出発点なのです。ここからあの子は成長し、やがてお兄さまと出会い、小説を書くことを知り、そして世界の終わりを模した壁との二度目の遭遇を果たすのです。そこそが、現在のあの子の物語——中心点——お兄さまの目指すべきところなのです」

「それが、その先……？」

しかし猫が向かうとしている先は、墨一色で塗りつぶした暗闇だ。

「その通りですわ。ああ、もし暗いことが不安なのであれば、ご心配なく。どうして何もないのか。それはあの子が考えていないからです。この城はあの子が小説に書き著した部分と、あの子が構想した部分は強固に出来ていますけれども、あの子が描けなかった部分は脆く……そう、抜け道のようになっているのです。ですからお兄さま、ここからあの子の次なる物語に行けるはずですよ」

それだけ言うと猫は躊躇なく暗闇の中に飛び込んでしまった。

ぼくは軽く絶望した。もう少しぼくに悩んだり考えたりする時間をくれたっていいものを。猫という生き物は、本当に自分勝手に強引だ。

ぼくは溜め息をつきながら、猫の後を追った。

暗闇はぬるりと生暖かかった。

遠くでまたひとつ、星が昇ってゆく音が聞こえた。

「それで、どうなったんだ」

ルーエのカウンターに置かれたコーヒーは、すっかり冷めてしまっていた。

まあ、猫舌のぼくはどうせ十分に冷めるまで飲むことができない訳だけれど。

「それで？ いや、どうもしないよ」

「はあああ。どうもしないわけがないだろう」

「そんなことを言われても……」

ぼくはすっかり困ってしまう。此町はえらく鋭い視線でぼくを睨んでいる。

語れないことはないけれど、ぼくにはそのつもりがなかった。どうしてだろうか。あの世界での出来事を話してしまうと、どうしたって夏海さんの内側、人間性を説明することになってしまう。誰だって、自分でさえ知りようがない深層心理を、自分の知らないうちに他人に説明されるのはいやだろう。

それに、そう。

これは後で夏海さんに聞いて分かったことなのだけれど、ぼくが彼女の中に入ったとき、夏海さんにはそれが分かっただけで、ぼくが魔王を見たことや、狩人と対決したことや、女王を追放したことや、本屋に説教したことや、その他もろもろを目や耳で見聞きするよりも、深いレベルで認識していたらしい。

もしそれが本当であるとするならば、あの長かったようで短いぼくの冒険は、ぼくの物語であると同時に、彼女の物語でもあると思う。

だから、そう。

ついうっかり魔王城の話はしてしまったけれど、そこから先の語り手の役目を、ぼくは夏海さんに譲りたいと思う。

「おい、早く続きを話してくれよ」

此町がせかす。

ぼくはコーヒーを一口飲んでから、口を開く。

そう。

今はまだ少し難しいかもしれないけど、夏海さんが回復したら、またきっと小説を書いてくれるだろう。そのときこそ、彼女はぼくの冒険をちゃんとした物語にしてくれるだろう。そのときこそ、此町はこの続きを知ることができるだろう。

だから、そのときまでは。

この物語は、ぼくと彼女だけのものだ。



いつか語られるきみとぼくの物語

<http://p.booklog.jp/book/40017>

著者：秋山真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/unjyoukairou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40017>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40017>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.